

## シンポジウム趣旨

「学校で動物を飼うことの意味を改めて考える」

コーディネーター 庭野正和（本研究会副会長／武蔵野大学客員教授）



### シンポジスト

渋谷一典 先生（文部科学省教科調査官）

宮川 保 先生（新潟県獣医師会会長）

茂呂美恵子先生（大田区立田園調布小学校長）

三橋正英 先生（相模女子大学小学部教諭）

「動物飼育を通して命を実感させ、情愛豊かな子供を育てる」ことや「学校動物飼育や動物介在教育が子供の成長に与える影響(体験の役割や教育効果)を飼育支援ネットワークの在り方を通して考える」ことを目指して本研究会が立ち上げられて20回という節目の研究大会を迎えた。時を合わせて、学校教育関連では次期学習指導要領が告示(小・中学校は平成29(2017)年3月31日)され、学習の質を一層高める授業改善をしていくために「主体的・対話的で深い学び」が示された。

小学校の動物飼育に関することでは、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと(教育基本法)」「各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにする(総則)」「地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得る(総則)」「生命を愛護(尊重)する態度を養う(理科)」「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができる(生活)」「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし(道徳)」「自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実する(特別活動)」等が挙げられる。また、教師、保護者、地域住民、専門家等による学校と社会との連携に関すること、教師の働き方改革に伴って学校地域支援本部の設置やファミリーサポート制度、自然災害時の動物飼育支援の在り方などが議論されるようになっている。

今回のシンポジウムでは、これらの現代的な課題を克服するためにはどのような教育実践をしていけばよいのか、次ページからの報告(4～11 ページ)の通り具体的な提案がなされ、参会者の今後の取り組みの拠り所となった。

寄せられた感想に「動物飼育によって行う教育がどのように行われているのか具体的に説明していただいて、理解と共にイメージができた」「実践されている学校の先生方、また獣医師の立場からの学校での動物飼育の課題が分かった」「飼育教育は必要不可欠であるものだと思わされる内容だった」「こういった機会がなければ、人はなかなか考えを突き詰めていけないので、こうした活動に積極的に参加していくべきだと思った」等があり、シンポジウムテーマの「飼うことの意味を改めて考える」契機になったと考える。